いのちと地域を守る

■むすび塾に参加して ―― 東松島市大曲小学区子ども育成会

【My持ち出し袋の中身】食料、水、懐中電灯、缶詰、カッター、ラジオ、ゲーム…【最初に選んだ物は】ペットボトル。雨が降ったら水をためておける。お湯を入れて湯たんぽ代わりにもなる。

＝大曲小6年・近藤逸貴君⑪

【My持ち出し袋の中身】水、ヘッドライト、電池、ウエットティッシュ、ゲーム…【参加して】防災についての意識が高まった。1カ月ごとに持ち出し袋の中身を確かめることを目標にしたい。

＝大曲小6年・佐藤匠真君⑫

【My持ち出し袋の中身】懐中電灯、ラジオ、財布、ボールペン、メモ帳…懐中電灯を入れたのは、夜、暗いのは怖いから。明るくしたい。

＝大曲小5年・近藤有那さん⑩

【My持ち出し袋の中身】懐中電灯、ラジオ、財布。ラジオはいろいろな情報を聞ける。ほかにも、むすび塾で使い方を考えた物を用意して入れておきたい。

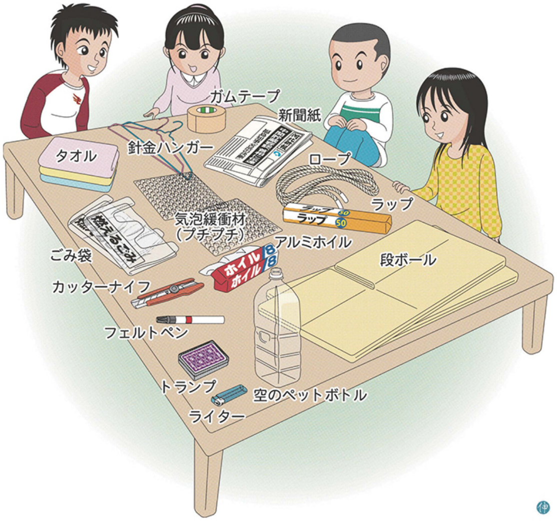
＝大曲小5年・津田愛さん⑪

【My持ち出し袋の中身】懐中電灯、水、電池、ラジオ、毛布、長靴…【参加して】ほかの人と防災について話す機会となり、大変勉強になった。育成会全体で学びを共有したい。

＝大曲小学区子ども育成会会長・柳橋征子さん㊲

【My持ち出し袋の中身】使い捨てカイロ、携帯トイレ、下着、靴下…【参加して】子どもや、ほかの人のアイデアを聞き「なるほど」と思った。持ち出し袋を車にも一つ用意したい。

＝大曲小学区子ども育成会・近藤裕美さん㊱



ガムテープ
新聞紙
タオル
針金ハンガー
ロープ
ラップ
気泡緩衝材（プチプチ）
アルミホイル
ごみ袋
段ボール
カッターナイフ
フェルトペン
トランプ
空のペットボトル
ライター

持ち出し品ワークショップの進め方

はじめに
大地震が発生し、電気や水道、ガスが止まり、しばらく避難生活をすることになりました

ステップ1
15品目の中から避難生活の中で使えそうな物を選んでみよう

ステップ2
選んだ物に、どんな使い道があるか、自分で考えてみよう

ステップ3
選んだ物が何に使えるか、みんなで意見を出し合おう

ステップ4
他にどんな物が欲しいか考え、15品目の中からもう一つ選んでみよう

ステップ5
15品目以外で欲しい物を考えてみよう

ま と め
当面の避難生活で必要な物を、「My持ち出し袋」に書き込んでみよう

15品目から選んでみよう

使い道と共助を考える

「持ち出し品ワークショップ」は、主に子どもたちが、生活に密着した物を通して防災・減災を考えるきっかけをつくり、備えや共助の意識を養うことを目的に、減災・復興支援機構（東京）が考案した。

用意する物は例えば、ガムテープ、ロープ、ラップ、フェルトペン、ライター、ごみ袋、針金ハンガー、新聞紙、空のペットボトル、アルミホイル、タオル、気泡緩衝材（プチプチ）、カッター、段ボール、トランプなど。

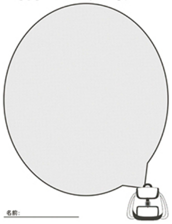
まず、大地震が発生し、電気や水道、ガスが止まったケースを想定し、避難所や自宅で生活する際に、役立ちそうな物を15品目の中から選ぶ。どんな使い道があるか考え、発表する。

次に数人のグループで、それぞれのメンバーが選んだ物について他の用途に使えないか、組み合わせられないか、意見を出し合う。15品目から必要な物をもう一つ選んだり、15品目以外で考えるなどしてみる。

話し合いを踏まえて、当面の避難生活で必要なものを「My持ち出し袋」に書き込む。各家庭に持ち帰って家族と話し合い、非常持ち出し袋を用意する。

機構の宮下加奈専務理事は「身近な物を使って、災害を乗り越える方法を考える体験を、子どもたちが防災・減災に取り組むきっかけにしたい。共助の考え方を知り、家族や学校、地域との協力の必要性を感じ取ってほしい」と話す。

My持ち出し袋を作ろう！



「My持ち出し袋」は河北新報オンラインニュースからダウンロードできます。トップページ「震災・防災」のバナーから入り「My持ち出し袋」のバナーをクリックした後、印刷してください。

東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は地域住民らと一緒に地震・津波に備える巡回ワークショップ「むすび塾」を開いています。名称には、地域と人、人と人のつながりを強め、防災・減災に結び付けていきたいとの思いを込めました。

次回の「むすび塾」は20日、宮城県七ケ浜町代ケ崎浜で開催します。

減災・復興支援機構理事長　木村　拓郎さん

家族や地域で役割分担を

非常持ち出し袋の中身について、男の子はゲーム機やお菓子などいっぱい書き出してくれた。でも少し考えてみよう。いざというときに全部を自分で持ち運ぶのは難しい。短時間で避難しなければいけないのに、その場でお父さんやお母さんに手伝いを頼むのは余計な手間になる。

普段から災害時に必要な物について「自分で持つ分」「お願いする分」を区別し、家族で持ち物の役割分担をするのが大事だ。水や食料、重くて持って行けない物に関しては町内会や地域で話し合い、避難場所に共同で保管しておく手もある。

むすび塾に参加し、皆さんは3年半前の震災で大変だったことを思い出したはずだ。少しずつ記憶は薄れていくが、次の災害がいつ襲ってくるかは分からない。当時の苦労を忘れ、今後の対策をおろそかにしては、あれだけの被害が出た震災の経験が無駄になってしまう。

難しいイメージのある防災や減災には、今回のようにゲーム感覚で楽しく学ぶ方法もあることを知ってほしい。親子で一緒に取り組めば、家庭の備えを底上げできる。地域の子どもたちや家族のイベントとして継続し、それぞれの備えだけでなく、震災の伝承につながることを期待したい。